

松尾千歳著『秀吉を討て 薩摩・明・家康の密約』  
(新潮社 令和4年8月刊 201頁)

---

岩 川 拓 夫

序

本著は作品名からすると、朝鮮出兵時の薩摩と明の合力計画のみを扱ったものと思われる方が多いかもしれない。しかし実際は、合力計画を主軸に据えながら、その前後、すなわち天文年間から慶長年間という中近世移行期における薩摩・島津の海外交流の歴史を取り扱ったものである。

著者は、島津家の歴史資料館・尚古集成館に長年勤め、令和5年で勤続40年を迎えた。博物館勤務において蓄積し続けた、九州南部とその地を治める島津氏の外交が劇的で魅力的なものだったのかをまとめたものだということができよう。

筆者は『西郷隆盛と薩摩』（吉川弘文館、平成26年）で、西郷隆盛を主軸としながら幕末・維新期の薩摩について知見をまとめているが、その戦国島津版が本著であると位置づけられるのかもしれない。近年の著者の作品を見ると、幕末薩摩藩の近代化事業が中心となっているが、1980年代の研究を見ると、「島津義久筆『在轡集』」（『尚古集成館紀要 第1号』、1987年）や「鹿児島ニ召置御書物並富隈へ被召上御書物覚帳」（『尚古集成館紀要 第3号』、1989年）など中近世移行期を題材としたものも多くみられ、講演会など多くの場でこの時代について発信し続けている。いわば著者の原点回帰として中近世移行期を俯瞰する著作が刊行されたといえよう。

---

本著の構成は以下のとおりである。

- 第一章 豊臣政権と朝鮮出兵
- 第二章 薩摩と明の合力計画
- 第三章 海洋国家薩摩
- 第四章 西洋との出会い
- 第五章 豊臣政権と島津氏
- 第六章 徳川政権と島津氏
- 第七章 途切れた明とのパイプ

第一章が中近世移行期の概要、第二章が作品名の本筋にあたる合力計画であり、以降の章はその前後の時代における薩摩・島津氏の外交史、政治史をまとめたものである。合力計画についての史料は限られているため、三章以降の内容で状況証拠として島津氏と明との計画の確かさを補完するような構成となっている。

第一章は、中近世移行期の日本全体のあゆみを紹介。その上で、同時期の島津氏の概要を提示し、徳川家康と島津氏との関係への疑問を提示している。全体的に日本史的な概要が列記されているが、これは日本史的なものだけでは従来できなかった課題を示すためのものであり、鹿児島県の歴史で考慮すべき東アジア史の視点に目を向けさせるための伏線と位置付けられる。

第二章が朝鮮出兵（唐入り）における薩摩と明との合力計画の内容である。東洋史研究者を中心に検討がすすめられてきたこの事件は、中国や朝鮮側の史料からうかがい知ることができる。すなわち、明出身の島津家臣を通じて、薩摩が明（福建軍門）と合力して豊臣秀吉を討とうと計画したという。実際に島津領国に福建から工作員が訪れ、日本・島津氏の動向を探っており、彼らが許儀後や郭国安といった明出身の島津家臣から情報を得ていた。明と明人島津家臣のやりとりが島津領国のみならず、戦場となっていた朝鮮半島でもおこなわれており、撤退時における和平交渉に義弘が尽力したのはこのネットワークが背景にあると指摘。さらに籠城する島津軍が明の大軍勢と対峙した泗川の戦いの直前にも双方が連絡をとりあっており、島津軍の動向に影響を与えた。明人家臣が明と密かに連絡を取り続けていたからこそ、島津氏が講和、撤退の重要な鍵になったと論じている。

合力計画の要因となる、明人ネットワークが薩摩でいかに根付いてい

たのかを理解することができるのが第三章である。薩摩が日本におかれる東アジアの窓口であり、それ故に室町期に勘合貿易の警護を期待され、「海の民」倭寇が領国各地に拠点を置いていた。地名から判別できるかつての外国人居留地の多さは交流、交易の証であり、明が工作員を派遣しやすい環境だったことがわかる。島津家に登用された許儀後は倭寇（大半が明人）のネットワークで薩摩に赴いた（あるいは連行された）明人であり、彼らの存在が合力を計画することができる人的根拠となりえた。海洋国家薩摩だったからこそ、多民族集団の家臣団を島津が形成することができたと理解することができよう。

倭寇のネットワーク上で到着した西洋人との交流について第四章ではまとめられている。薩摩の人々は地の利を活かし、火縄銃やキリスト教など最新の文物を真っ先に手に入れることができた。一方で、キリスト教については最初にもたらされた地でありながらも、九州北部と比べて深く根付くことはなく、それ故に西洋人との交易はさほど拡大しなかった。イエズス会からの租借地提案を拒むように、彼らは全てを受け入れるのではなく、吟味しながら受容していたことも理解できる。イエズス会からの求めに応じて山川から喜入にかけてが租借地となっていたならば、長崎同様、秀吉の直轄地になっていたであろうし、そうなのであれば、明と明人島津家臣が連絡を取り合うことは極めて難しかったと指摘。西洋人とのほどよい距離間が、結果的に朝鮮出兵時のネットワークを成り立たせていたとしている。

第五章では視点が国内に移り、戦国島津の領国統一から九州平定に向けた道程と、それに立ちはだかった豊臣政権との関係について紹介。豊臣政権との合戦直後に末弟・家久を失い、秀吉からの命令で三弟・歳久を失った「島津四兄弟」。残った義久、義弘の兄弟を含め、薩摩の人々は豊臣政権に奉仕するための朝鮮出兵には消極的であり、これが明との合力計画の精神的根拠となりえたといえよう。島津軍を率いて渡海し、秀吉から島津家の代表と位置付けられた義弘でさえも、厭戦気分を妻宛ての書状にしたためており、豊臣政権からの命令のためやむを得ず従軍していたことがわかる。

朝鮮出兵後の国内動向が主軸になる第六章では、朝鮮撤退後の恩賞から庄内の乱、そして関ヶ原合戦とその和平まで徳川家康が島津氏を厚遇

しようとしていることを紹介。日本に帰国した島津軍は唯一加増を受け、直後に起こった豊臣政権と島津氏のパイプ役をつとめていた筆頭老中・伊集院幸侃を島津忠恒が暗殺した時も大きな処罰がくだされなかったのは、秀吉死後の政権を牽引した家康の存在あつてのことであることがうかがえる。伊集院一族の反乱（庄内の乱）を家康の仲介によって鎮めた島津氏が、家康の畿内における政治拠点・伏見城の家康不在時の留守を預かるよう依頼を受け、その後におこった関ヶ原合戦後に処分がくだされることなく和平が締結。さらに忠恒が家康から「家」の字を与えられたことも特別であったと指摘している。これらの厚遇の背景として、海外交易を見据えた家康にとって、明と太いパイプを持つ島津氏を通じて交易の再開を期待していたからと分析している。

最終章では家康死後の島津領国での交易、交流について紹介。いわゆる「鎖国」の体制が完成しようとする中、居留地も海外からの船も減少しながら、それでも島津領国に残った明人たちと、彼らの祖国の滅亡後の交流について触れられている。

鎌倉時代初期から現代まで800年続く島津氏が、戦国乱世を生き延びることができたのは、海外に開かれており、それを効果的に活かすことができたこと、さらに他者がそのような島津氏に大いに価値、もしくは魅力を抱いていたからといえるのではないだろうか。

## 二

本節では著作の内容のうち、2つの点について論じたい。

1点目は、合力計画そのものである。朝鮮出兵前、明人島津家臣が渡海情報を伝え、その中には義久が「東海道」と内通し、謀反のために密議をしたとある。これを受けて福建からの工作員が内之浦に上陸。工作員の報告を受けて、義久を味方に引き入れて秀吉を討たせようという提案が福建軍門から出されるも、提案者失脚のため頓挫。その後、工作員の来訪や明人島津家臣から福建軍門への「薩摩と明で協力して秀吉の城を攻め落とす」という提案が出されるも、これも皇帝の耳には入らずに不発に終わった。秀吉の死後の撤退時も、攻め手の明軍に島津領国に赴いた経験のある工作員が加わっており、双方で講和に向けた交渉がおこなわれている。

これらのやり取りは、薩摩側の史料にはその傍証がうかがえるだけで、詳細が判明するのは中国、朝鮮側の史料である。合力計画自体は福建軍門を中心に存在していたのであろう。では、これに島津側がどれほど関わっていたのであろうか。第一報を伝え、義久たちの内情を知る明人島津家臣が直接関与しているのは間違いないが、義久や義弘がそれを知っていたか、認めていたかは不明瞭だと言わざるを得ない。ただし、知っていたか認めていたかなどの可否はともかく、朝鮮出兵撤退時に最前線で義弘が講和交渉のために奔走できたのは、彼らのネットワークがあったからにはほかならない。この交渉がなければ、撤退戦での大勝利も、その後の薩摩藩の歩みも全く異なっていたであろう。

「東海道」が徳川家康を意味すると解釈している点についても議論されるところだろう。朝鮮出兵時点で家康はすでに関東国替えがおこなわれており、東海道を治めていたのは過去の話と思うかもしれない。しかし実際、行政区分としての東海道は関東平野までおよぶことを考えると、「東海道」が家康を示す言葉であってもおかしくはない。さらに許儀後の家康が救い、後年、許儀後が薬を送った話や、第六章でみられる家康と島津氏との関わりを考えると、密議をすることはありうるのではないだろうか。家康を指す言葉として「東海道」が用いられる他の史料があればより確定的になるのであろうが、上記のような理由から可能性は極めて高いといえよう。

2点目は、著作の底流を流れる新しい鹿児島歴史像である。薩摩や島津氏の旧来型の固定化したイメージは非常に根強い。例えば「武一辺倒で文化的に遅れている土地柄である」。実際は武だけでなく、外交や海外交流の中で手に入れた文化の水準が高いことは垣間見られる。あるいは「徳川と島津は常に対立していた」という固定観念。本当は、関ヶ原の戦いや戊辰戦争はほんの一時的な敵対関係にすぎず、関ヶ原以前や幕府成立以降は有力な協力者として徳川から目されていた。また朝鮮出兵の撤退戦で抜群の軍功を挙げているが、積極的に戦っていたのは慶長の役、特にその撤退時ぐらいであり、前半戦にあたる文禄の役については厭戦気分が漂っていたことが紹介されている。しかし、固定化されたイメージで狂戦士の如く縦横無尽に朝鮮半島で奮戦したかのように思っている人たちもいるようだ。著者があとがきで記しているように、古く

から抱かれがちな閉鎖的、田舎なイメージとは全く異なる、東アジアに開かれた最先端の文物を手に入れられる魅力的な土地がかつての鹿児島だった。

旧来型の固定化したイメージがそう易々と崩れるものとは思えない。しかし著者が今まで講演会や著作物で訴え続けたように、何度でも伝え続けることで、少しずつイメージが変化していくことを期待したい。

## 結

「あとがき」で紹介されているように、著者は福岡出身で大学進学を機会に鹿児島に移り、それから間もなく45年になろうとしている。著者の研究の原点は、県外の人が鹿児島・鹿児島の歴史を調べた時の衝撃があるように感じる。鹿児島の歴史像がいかに固定化されてしまっているか、そして史料からうかがえる薩摩の文化がいかに豊かで魅力的であるか、それらをいかに伝えるかが著者の業績であろう。いわば本著のプロローグで紹介されている藤原惺窩や1540年代に山川港を訪れ、薩摩の様子を『日本報告』としてまとめたジョルジュ・アルバレスの現代版の人物が著者であるといえるかもしれない。

末尾になるが、私は著者が鹿児島大学で講義を始めた時に受講し、以来20年近く指導をいただいている。その間、尚古集成館学芸員として6年間、業務の指導をいただいた。この書評で学恩に報いることができたとは思えないが、長年鹿児島の歴史学界を牽引し続けている著者に敬意と謝意を表し、本論を締めくくることとする。

(仙巖園学芸員・鹿児島国際大学非常勤講師)